

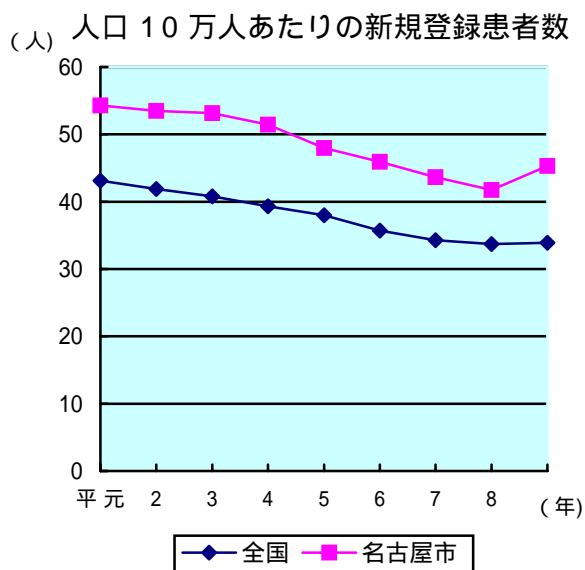
へるす・りさーち

名古屋市衛生研究所だより No. 10

「どうも調子が悪い。結核かも…」

インフルエンザ 815 人、結核 2,742 人

これらは平成 9 年に日本でそれぞれの病気で亡くなった方の人数です。今年 7 月に厚生省から「結核緊急事態宣言」が出されました。結核患者数は日本人の生活レベルの向上や薬剤の開発により年々減ってきましたが、平成 9 年に新たに結核として登録された患者数は前年に比べ増加しました。結核は、平成 9 年では約 42,000 人の新規患者が発生し、約 2,700 人が死亡するという我が国最大の感染症です。名古屋市の新規登録患者数も平成 9 年から増加に転じています（右図）。



はっきりしない自覚症状に注意

「咳が続くけれど、きっとただの風邪だろう。」

「なんとなく体のだるさが抜けない。疲れすぎかな？」

などと思いつまないうちに早めに医師の診察を受けましょう。主な自覚症状は、2 週間以上続く咳、痰、血痰、発熱、胸痛、だるさ、寝汗などで、風邪や疲労と区別がつかないものが多いようです。病状が悪化すると、自分の「咳」や「くしゃみ」の際に結核菌が混じるようになり、家族や職場の人をも感染させるおそれがあります。

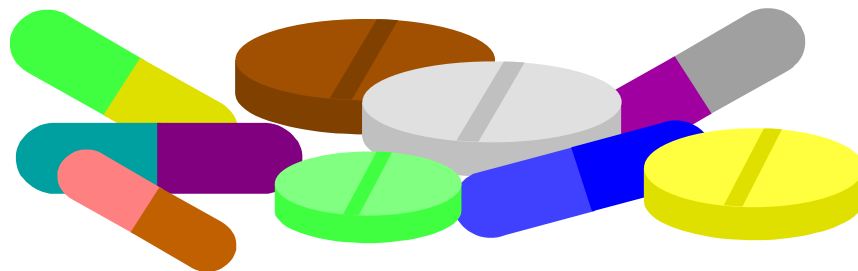
また自覚症状がほとんどなくても、健康診断の胸部レントゲン写真で見つかることもあります。年に 1 度は健康診断を受けることをおすすめします。

薬が効かない結核菌

薬を使っても死なずに繁殖を続ける菌（「薬剤耐性菌」という）による感染症が、深刻な問題となっています。結核も例外ではありません。「多剤耐性結核菌」といって、結核治療の中心である2種類の薬（イソニアジドとリファンピシン）のどちらにも抵抗力を示す結核菌が出現してきました。この菌をつくりだす大きな原因の一つとして、結核治療の中断があげられています。結核の患者さんがご自分の判断で薬を飲むことを止めてしまった結果、完全に死ななかった結核菌が薬に対して抵抗力を持ってしまったのです。

全国の結核登録患者のうち1,500人から2,000人程度が、この「多剤耐性結核菌」による結核患者であり、その患者数は毎年約80人ずつ増加していると報告されています。これは、治療が困難な結核が増えてきていることを意味します。

もし結核にかかってしまったら、必ず主治医の指示に従って正しく薬を飲みましょう。それが自分の結核を完全に治すことであり、「多剤耐性結核菌」をつくらないことにもつながります。



おわりに

結核の自覚症状は、風邪や疲れとまちがえられることがあります。そのため、受診がおくれて病状が悪化しやすいのです。咳やだるさが長く続くようでしたら、結核の可能性もあります。早めに医師の診察を受けましょう。

そして、もしも結核と診断されて治療を開始した場合には、主治医の指示に従って正しい服薬を心がけましょう。

参考文献

- 1) 「結核緊急事態宣言」平成11年7月26日発表 厚生省
- 2) 「結核の統計1998」 結核予防会
- 3) 「平成9年 結核の概況」 名古屋市衛生局
- 4) 「現代の結核 いま何故こんな病気が」 森 亨 著 ニュートンプレス社

編集・発行 名古屋市衛生研究所 疫学情報部

〒467-8615 名古屋市瑞穂区萩山町1-11 TEL841-1511 / FAX841-1514

環境保護のため再生紙（古紙配合率100%、白色度70%）を使用しています。

（1999.9）